

ヤリチン男に制裁を♡
～カントボーイがペニバンで二度とオンナを
抱けないカラダに墮としてやった♡～

その日は、^{くす}国栖アキラにとって間違いなく『最高の一夜』になるはずだった。

行きつけのバーで見つけたターゲットは、吸い込まれそうな大きな瞳に、透き通るような白い肌の持ち主。色素の薄い柔らかな髪と魅力的なボディラインを持つ、まさに100点満点の『極上のカントボーイ』だった。

まんまと誘いに乗ってきた彼の、少し恥ずかしそうな微笑みを見た直後、アキラの記憶は……そこでブツリと途切れた。

※

「……んっ」

意識が浮上したとき、アキラは強烈な違和感にガバッと目を見開いた。

無機質なコンクリートの壁。不自然なほど明るいLEDの照

明。鼻を突くのは、消毒液と機械油の匂い。そして何より……自分の身体が、指先ひとつ思い通りに動かない。

よく見れば、身ぐるみ剥がされた全裸状態で、両手両足が冷たい金属製の手錠でベッドにガッチリと拘束されている。特に両足は折り曲げられて固定され、いわゆるM字開脚の状態でペニスもアナルも丸出し状態だ。

「は、え……？ 嘘だろ、何これ……っ！」

「おはよう、アキラくん」

ガチャガチャと手首を鳴らしてパニックに陥るアキラの耳に、この空間には不釣り合いな、のんびりとした声が響いた。

「お、まえ……っ！ なんだよこれ！」

声のする方を見やると、そこに立っていたのは、アキラが昨晩ターゲットにしたあのカントボーイだった。

だが、バーで見せていた可憐な微笑みはすっかり影を潜めている。今は、ベッドで無様に転がっているアキラを、汚いものでも見下ろすように冷たく笑っていた。

「……おい、俺に何をした！ここは、どこだ……っ」

「ふふ。バーテンダーにお願いして、お酒に強力な睡眠薬を混ぜてもらったんだ。……全然起きなかったから、運びやすくて助かったよ」

ユキヤは、拘束されて身動きの取れないアキラをじっくりと観察しながら言葉を続ける。

「今から僕の開発した最高の商品を使って、たっぷりと『メス堕ち』させてあげる♡」

「っ、ふざけんな！俺がお前に何したっていうんだよ」

いまだに状況が呑み込めず、キャンキャンと吠え立てるアキラ。そんな彼に、ユキヤはスッと冷たい瞳を細めた。

「……僕の名前は、市來^{いちき}ユキヤ」

「ユキヤ、って……まさか……」

「ふふっ、流石のバカでも思い出したかな？……高校時代、君がヤリ捨てた『肉便器』だよ」

「!!!」

市來ユキヤ。高校時代、アキラに告白してきた同級生の名前

だ。頭は良いが、重たい黒髪と長い前髪で顔を隠した、ひどく地味で冴えない男。見た目は全く好みではなかったが、カントボーイだと知って興味本位で手を出した。

しばらくは『肉便器』というあだ名をつけては気まぐれに抱いたが、すぐ飽きたので手ひどくフットその男……。

「え、マジで……？ お前、本当にあのユキヤ……っ？」

記憶の中の薄暗い同級生と、今日の前にいる、美しい男。ふたつの姿が、アキラの頭の中ではどうしてもリンクしなかった。

「君にフラれてから、すごく努力したんだよ。必死で勉強して、起業もした。この見た目も……それもこれも全部、君に復讐するため♡」

ユキヤはゾッとするほど艶やかな笑顔を向けると、おもむろにアキラの口元へ、怪しげなピンク色の液体が入ったボトルを突きつけた。

「さあ、これを飲んで？」

「なっ、なんだよそれ……!」

「ふふ。君がブットんじゃう薬だよ♡」

「ふざけんな! そんな怪しいもん飲めるかよ!!」

アキラが顔を背けて叫んだ瞬間、ユキヤの顔からスッと表情が消えた。

「……君に拒否権があると思ってんの？」

氷のように冷たい声。

直後、ユキヤはどこからともなくギラリと光る小型のノコギリを取り出すと、無防備に晒されているアキラの股間に冷たい刃をピタリと当てた。

「素直に飲まないなら、その汚いちんこ、根元から切り落とすよ？」

「ひっ……!? の、飲む! 飲むから……ッ!」

「ふふっ。最初からそうやって素直になればいいんだよ、お馬鹿さん♡」

言うが早いか、ユキヤはアキラの髪を無造作にガシッと掴

み、強引に頭を後ろへと反らせた。

「あ、がっ……!」

首が伸びきり、無防備に喉仏を晒したアキラの口に、小瓶の口が乱暴にねじ込まれる。そのまま、ドロリとした甘ったるいピンク色の液体が、容赦なく喉の奥へと流し込まれた。

「んぐ……っ!? げほっ、んんっ、んくっ……!」

息継ぎすら許されないペースで注ぎ込まれ、アキラは苦しげに咽びながらも強制的に媚薬を飲み下していく。

飲みきれず口の端からこぼれ落ちたピンクの液体が、顎を伝い、胸元へと淫らに滴り落ちていった。

一滴残らず飲ませ終わると、ユキヤは空になった小瓶をポイッと無造作に床へ放り投げる。

「アキラくん。僕といっぱい、あそぼお♡」

ユキヤの弾むような声と同時に、彼が手元のリモコンを操

作した。

「……っ!？」

ウィーン……という低いモーター音が冷たい室内に響き渡る。ただのベッドだと思っていたそれは、手錠で拘束されたアキラの四肢を固定したまま、生き物のように変形を始めた。

背もたれが上がり、腰の下のマットがスライドして開く。下から現れたのは、大きな金属製の受け皿だ。さらに腰の部分だけがグリーンと高く持ち上げられ、まるで分娩台に乘せられたかのようなあられもないスタイルで強制的に固定されてしまった。

「まずは腸内洗浄からだね。んふふ、たーのしみ♡」

パニックで声も出せないアキラを置いてけぼりにして、ユキヤがカラカラとキャスター付きのワゴンを引いてくる。

そこに乗っていたのは、謎の液体が満たされた巨大なタンク。そして、無機質な機械音を立てるポンプと、そこから伸びる太い透明なシリコンチューブだった。

「な、に……っ!」

ユキヤは太いチューブの先端に淡々と潤滑ゼリーを塗りつけると、アキラの剥き出しのアナルへピタリと押し当てた。

ヌチュ……ツ。

「ちょっと苦しいかもしれないけど、男の子だから、我慢してね♡」

ズチュルルルウツ……! ヌポポォツ!!

「ひぎい……っ!!??」

ユキヤが容赦なくチューブを押し込むと、固く閉ざされているはずのアナルをあっさりと割り開き、太い異物がズブズブと腸の奥深くへと侵入していった。

「ふふ。さっきのお薬が効いて、身体もいい感じに弛緩してるね♡」

「ひっ、も……ぬ……抜、けえっ……!」

「それじゃあ……スイッチ、オン♡」

ズチュ、ゴボオツ、チュポポポポツ……!!!

「あ、がつ……!? んんっ、あ、ああ あッ!」

透明なシリコンチューブを通して、生温かい洗浄液がアキラの腸内へと猛烈な勢いで流れ込んでくる。

「ひいつ、あ、むりっ、破裂、破裂するっ! やめ、とめてくれえッ!」

どれだけ叫ぼうと、機械による強制的な注入は止まらない。限界を超えて注ぎ込まれる水圧によって、引き締まっていたはずのアキラの下っ腹が、まるで妊婦のようにぽっこりと、不自然な丸みを帯びて膨れ上がっていく。

「あはは、ひっといポテ腹だね♡」

「……っ、あ、あああ! もう、むりっ、はちきれ、るう……っ!」

パンパンに張り詰めた腹の激痛と圧迫感に、アキラが白目を剥きかけたその時。ピッ、と小さな電子音が鳴り、ようやく不快なモーター音が止まった。

「辛かったねえ。じゃあ……出していいよ♡」

じゅぽんっ!

軽い音を立てて、ユキヤがアキラの腸内から太いチューブを引き抜く。栓を失った後孔から、限界までせき止められていた大量の液体が、今にも一気に溢れ出そうになっていた。だけど……。

(こんなの、排泄みられるようなもんだろ……っ!?)

男としてのプライドが、アキラに必死で尻の穴を引き締めさせた。ガクガクと太ももを震わせ、脂汗を流しながら耐える。

しかし、限界まで膨れ上がった腹の圧力と、薬でゆるゆるに融けた粘膜がそれを許さない。

……ジュプツ

「あ、出てきた♡」

「あ、あゝっ、いやだ、み、みるな……ッ!」

ビチュツ、ブジュルルルウウツ……!

「あ、ああああッ! でる、でちゃうう〜〜〜〜〜っ!!!!♡♡
♡♡」

アキラの悲鳴とともに、中に入っていた洗浄液が勢いよく噴き出した。

バシャバシャッ! と、下にセットされた金属製の受け皿に、あられもない排泄音が響き渡る。

「いやあっ、あ、あひッ! ああ あ ……っ!」
「すごいすごい。勢いよく出てるね、……アキラくん。お漏らししちゃって、とっても恥ずかしいね♡」

自分の意思とは無関係に中身をぶちまける屈辱。

しかしそれ以上にアキラを絶望させたのは、排泄するという行為そのものが、背髄が痺れるほどの強烈な『快感』を生み出していることだった。

(ひぐっ、ああっ、きもちい、とまんないっ……!!♡♡)

涙と涎で顔をぐしゃぐしゃにしながら、アキラは腹の中の液

体をすべて絞り出すように腰をガクガクと震わせる。

その光景を、ユキヤは極上のエンターテインメントでも見るかのように、目を細めてうっとりを見下ろしていた。

「よくできました♡…… でも、1回だと足りないから、2回目いくね～」

「えっ……？ うそ、だろ、あ、がっ！ むり、もう、……あひッ！」

休む間も与えられず、再び容赦なくねじ込まれる太いチューブ。

2回、3回……。中が完全に綺麗になるまで、絶望的な腸内洗浄は執拗に繰り返された。

※

「あ、あひ……っ、ああ……♡」

度重なる洗浄と排泄。あまりに強烈な恥辱の連鎖に、アキラはぐったりと力なく元の形に戻ったベッドの上で横たわることしかできない。

意識は濁り、身体は重いが、無理やり飲まされた薬のせいで、いまだ解放されないペニスははち切れそうなほどに起立し、ズキズキとした鈍い熱が全身を支配していた。

(ちんこもケツも、身体ん中熱くて辛い……っ！ なんでもいいから、早く、楽にしてくれ……っ！)

「あんなに恥ずかしいことしたのに、おちんちん、ギンギンだね」

ユキヤの低く、楽しげな声が鼓膜を震わせる。

「市来……なあ、悪かったから……許して……っ」

かつての傲慢さをかなぐり捨てて必死に懇願するアキラ。しかし、ユキヤの瞳には冷ややかな愉悦の色が浮かぶだけだった。

「アキラくんさあ……。覚えてる？ 僕の、おまんこ♡」

おもむろにユキヤは衣服をすべて脱ぎ去り、アキラの目の前に君臨した。

自らの手でその秘所を、くばあ……と見せつけるように左右に割り開く。真っ白な内股、そこには見覚えのある黒子がひとつ。

(ああ……。本当にこいつ、あの時の、市來なんだ……)

その視覚的な確信が、アキラの心臓を絶望で締め上げる。そんなアキラの戦慄を嘲笑うように、ユキヤは一切の躊躇なくその身を沈めた。

くちゅ……っ♡ぬち♡ぬち♡

「あ、あひッ!? や、めっ……ああッ!」

熱い粘膜が密着し、卑猥な水音が響き渡る。アキラの怒張にユキヤの湿り気を帯びた割れ目が添えられ、執拗に前後される。いわゆる素股だ。

「んっ♡……あはっ。素股だけでめっちゃ喘ぐじゃん♡ 気持ちいいんだ?」

「気持ち……いっ……っ!! 挿入……挿入、させてください……っ!!」

惨めでもいい、男としてのプライドなんてどうでもいい。一刻も早く、この焼きつくような熱から救ってほしくて堪らない。しかし、ユキヤは極上の笑みを浮かべて囁く。

「だあめ♡」

ユキヤは無慈悲にその身を離した。熱源を失い、空気に晒されたアキラのペニスが虚しく震える。

「これからオンナを抱けない身体になるんだもん。素股で十分でしょ♡」

「……っ!? なに、……なにを……っ」

絶望に目を見開くアキラを置いてけぼりにして、『何か』を手に取り、自らの腰へと装着し始める。

「僕ね、ずっとずっと考えてたんだよ。カントボーイだからって、都合よく抱かれるばかりなんておかしいって。僕らだって男なのに……。好きな相手を、自分のモノとして抱きたいって思うじゃんか。ねえ、アキラくん？」

ユキヤの低く、淀みのない声のアキラの心臓を冷たく撫で上

げる。

準備を終えたユキヤが再びベッドに歩み寄った時、その腰には、本物の男以上に猛々しく起立した『凶器』が備え付けられていた。

「紹介するね。僕が開発した『メスイキペニスMAX』だよ♡」

「っ、やだ！ やめろ……っ！ 来るな、近寄るな……!!!」

これから自分の身に何が起きるのか。その本能的な恐怖に狂乱し、アキラは手足の拘束具をガチガチと激しく鳴らしながら無様に暴れ狂う。

しかし、ユキヤは問答無用でその脚を左右へと大きく割り開いた。

「このペニスバンドの魅力は、なんといっても徹底したリアルにあるんだ。バンド部分は肌に馴染んで目立たない素材を使い、質感はもちろん、内部にヒーターを内蔵して温度まで本物を再現した。だから、挿入した時に冷たくて興奮めするなんてこともないよ」

「ごめんなさい……っ！ 悪かった、謝るから！ やだ、そんなの入

れられたら……っ!!」

アキラの必死な謝罪など、ユキヤの耳には届かない。まるで新製品のプレゼンでもするかのように、至近距離でその機能を語り続ける。

「そして極め付けは『ナカ出し機能』と『快感リンク機能』。中から擬似精子を勢いよく発射できるし、装着している側も、実際に射精したかのような電気信号が送られる仕組みなんだ。……ねえ、素敵でしょ？」

ユキヤはうっとりと微笑み、熱を帯びたその先端を、アキラの恐怖でヒクつくアナルにぬらぬらと擦り付ける。

「あ、そうだそうだ。実は今回モニターさんも呼んでるんだ……入ってきて♡」

「な、に……？ っ、うそうそうそ……っ!? なんで、お前ら……っ!!」

部屋に入ってきたのは、10人のバスローブを着た男たち。彼らには見覚えがあった。かつてアキラが都合良くやり捨ててきたカントボーイたちだった。みんな目をギラギラと血走らせて

アキラを見ている。

「彼らにもモニターとして『メスイキペニスMAX』を体験してもらおうよ♡まずは、早速アキラくんの処女、奪っちゃいます……っ
と♡」

ぐぷ……ドグチュっつっつっつっつ!!!!♡♡♡♡♡

「は!?ヤダヤダヤダヤダヤダ!!!助け……っ、お"お"お"お"お"
お"お" ~~~~~っつっつ!!!!????♡♡♡♡」

アキラの必死の命乞いを無視するように、凶悪な太さのメスイキペニスMAXが、震えるまんこを容赦無く一気に貫いた。

「やった♡メス穴貫通、おめでとう♡」

ユキヤが腰を深く沈めると、グチュリと卑猥な音が響き渡る。あまりの質量に、アキラは弓のように背中をのけぞらせ、酸素を求めて口をパクつかせながら、ただ絶叫することしかできない。

「すごいっ! あのクズ男が、挿入されただけでこんなメス顔晒し

てる……」

「メスイキペニスMAX……すげえな。俺たちの救世主じゃん」

周囲を囲むカントボーイたちの嘲笑と感嘆が入り混じった声が、アキラの恥辱を限界まで増幅させる。

「は、んっ♡処女おまんこ、せつま♡……ねえアキラくん。はじめておちんちん挿入された感想は？どんな気持ち？」

「あゝひ……っ、あ、ああ……っ♡」

「やば♡トンじゃってるんですけど♡」

ぱんっ!!♡♡ぱんっ!!♡♡ぱんっ!!♡♡ぱんっ!!♡♡ぱんっ!!♡♡ぱんっ!!♡♡ぱんっ!!♡♡ぱんっ!!♡♡ぱんっ!!♡♡

「あゝっ!?アゝッアゝッアゝッアゝッアゝッアゝッアゝッアゝッアゝッアゝッアゝッ、オゝホッ!!!♡♡♡」

爆速ピストンとともに、アキラの脳内は強制的な快楽で真っ白に塗りつぶされていく。

悔しいのに。死ぬほど恥ずかしいのに。……偽物ちんぽにメスしこりを執拗にえぐられて気持ちいい。獣のようなあられも

ない喘ぎ声が止まらない。いっそ痛みがあった方がマシだと思えるほど、逃げ場のない快感がアキラを追い詰めていく。

「……あれ、ナカびくびくしてない？イきそう？」

「お”っお”っお”っ!?!♡♡♡ ひぐ、やらあ”あ”あ”っ!?! イぎたぐ、ないっ!?! イぎだぐな、いいいッ!?!♡♡♡」

男としての最後の意地で拒絶しようとするが、せり上がってくる絶頂の波は容赦なくアキラの意識を飲み込んでいく。

「へえ?……みなさん。アキラくんがそろそろイきそうなんで、応援してあげましょう♡……ほら、頑張れ♡頑張れ♡」

ドス!!ドス!!ドス!!ドス!!ドス!!ドス!!ドス!!ドス!!ドス!!ドス!!ドス!!ドス!!♡♡

「「「「「「「「頑張れ♡頑張れ♡」」」」」」」」」」」」

部屋を埋め尽くす10人の男たちの、揃いも揃った嘲笑混じりの唱和。それが最後の一押しとなり、アキラの防波堤は音を立てて決壊した。

「おっ~~~~~っっっ!!!!????♡♡♡♡イ
グッ!!♡イグイグイグイグイグ!!!!っ、おおおおお
おおおおおおおおっっっっ!!!!????♡♡♡♡」

アキラが白目を剥き、言葉にならない絶叫を上げながら果
てた瞬間。ユキヤもまた、『快感リンク』による衝撃に声を震わ
せた。

「っ、まじ処女まんきっつ……僕もナカに出すっ……!!!♡♡
♡」

どぶびゆるるるるるるるるるるる~~~~~
~~~~~っっっっっっっ!!!!!!♡♡♡♡♡♡

「~~~~~っ、お♡♡♡♡」

……ぶるんっ!!!

「はう……雄イキ気持ちかった……っ♡ご覧ください。『ナカ出  
し』機能によって、タイムラグなくおまんこにびゆくびゆく射精で  
きました♡」

ユキヤが腰を引くと、すっかりメス穴のようにとろとろに蕩けたアナルが、締めりを失ってクパッと開く。そこから、先ほど放たれたばかりの白い液体が、とろりと内腿を伝って溢れ出した。

しかし、アキラの股間に目をやれば、そこには射精できずに、勃起したままフルフルと情けなく震えるペニスがあるだけだった。

「……おや？アキラくんのおちんちん射精していませんか？メスイキ上手にできたみたいです♡ メス堕ちおめでとう!!」

「「「「「「「おめでとう!!」」」」」」」」」」」」」

パチパチパチパチ……!!!!

拍手が鳴り響く中、アキラは涙と涎で顔をぐしゃぐしゃにし、快感に震わせるしかなかった。こんな、脳が融けるような快感を知ってしまったら、もう……堕ちるしかない。

「さあ、お次はモニターさん順番に体験してみましょう♡まずは、先頭のあなたから♡」